389
87/1

始

24656
す

泰西詩人叢書

第八編

バイロン名詩選集

松山敏譯

在田稠裝幀

聚英閣

1926

大正
15. 6. 25
内交

My dear Murray
Byron

389-87イ

序

奔放不覊の天才詩人バイロンは、十九世紀の世界的大詩人であつて、實に熱烈な革命兒であつた。彼は當時の英國詩壇に於て、空前の魔力を振ひ、ペンを以て世界を風靡しようとした。然も何物をも恐れず、何物にも屈せなかつた強い人生の戰士であつた彼は、終にそれを實現することが出來たのである。

既に彼バイロンに就ては、獨逸の世界的大詩人グーテをして、賞讃措く能はざらしめたのみでなく、我國に於ては、ニイチエを熱愛した高山樗牛が、バイロンの價値を次のやうな言葉で立證してゐる。

われをして詩人たらしめば、願くばキョネルたらむ、唯それキョネルたる能はずば、願くばバイロンたらむ、バイロン尚ほ能はずば、願くばハイネたらむ、バイロンには惡魔の力あり、ハイネには毒蛇の舌あり。世に凡人の數、幾十百千萬ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ、願くば彼等の十萬を割いて一バイロンを得む。

猶ほバイロンの詩には、優雅さはないが、熱烈な情緒が充ち溢れてゐる。依つて誦むうちに、知らず識らず心を動かされる。この意味に於て、ゲーテやハイネと共に、もつと愛誦されていゝと思ふ。

この集は謂はゞ、バイロン大觀とも言ふべきもので、彼が若い時に詩作した所謂初期の傑作を初め、後年に至るまでの代表詩の全部を收

めた。依てバイロン愛好者の爲めに、意義あるものとして役立てば、譯者は望外の幸に思ふ。

大正十五年五月

譯者

目次

初期の詩より

D――に……五
友人の墓碑銘……七
無題……一一
無題に答へて或女に贈る……一三
若い處女の死を悼みて……一五
E――に……一九
アナクレオンの戀愛詩……二一

エムマに……二四
M・S・G――に……二九
カロリンに……三五
ある女へ……三九
戀の初めての接吻……四二
斷章……四六
M――に……四八
若い女に……五二
戀人に……五七
メヂアの歌……六一

ダミキタス……六八
涙……七一
思ひ出……七八
エリザに……八〇
マスターズ夫人へ……八五

後年の詩より

或る處女へ……九三
二人が別れる時……九八
お前は幸福だ……一〇二
別離……一〇七

戀の始めを訊かれて……一二〇
永久に戀するを得ば……一二一
二人はもう彷徨しない……一二二
彼女は美しくして歩く……一二四
私の心は暗い……一二七
私はあなたの歎くのを見た……一二九
ヘロッドの悲しみ……一三一
妻と別れるに際して……一三五
『チャイルド・ハロルドの廻遊』より
別れの歌……一四七

『パリシナ姫』より
あひびき……一六一
『ドンジユアン』より
希臘の島々……一七一
『海賊』より
メドラの歌……一七九

バイロン名詩選集

松山　敏　譯

初期の詩より

D――に

私は君をおろそかにその死をもて、
得られる友と思つてゐた、
しかも妬みは毒手により、
私の心から永久に奪つて行つた。
全く妬みは私の心から君を奪つた、
しかし、私の胸に今も君はゐる、

ねえ、この胸に君の姿を抱きしめよう、
　この胸の動悸の沈むまで。

そして墓で君の死骸が蘇（よみがへ）り、
またこの土の上に生命をさづけられた時、
君の愛しい胸に私の頭をあてよう——
君なくて何處に私の天國があらうか？

友人の墓碑銘

おゝ、わが友よ！　常に愛する親しい友よ！
今はもう流しても甲斐なき涙が、君のために如何にその棺（ひつぎ）を濡らし
　たことだらう！
死の苦痛に悶えるときに、
悲しい溜息が如何に汝の呼吸を亂したか？
若し涙が死の神の歩みを止め得る力があり、
その溜息が無慈悲な投鎗をそらすことが出來て、

青春と有德とが暫しの猶豫を求めることが出來れば、
また美貌と妖魔とに魅せられて、
君は犧牲から離れ去り、
君は更に生きることが出來て、君の友は祝福するだらう。
若し君の溫和な魂が、
墓地近くにやつて來たならば、
こゝに君の友の喜びは私の胸の上にもしるされる、
眞實な友の名譽と友の喜びのために、
深刻な彫刻師の巧みにも任せ得ぬ悲哀を讀むことが出來るだらう、
君の靜かな眠りの床の大理石はないが、

生きた像の悲しみを人は見る、
君の父上が血統の斷絕するのを悲しんだとて何にならう、
君の父上の悲しみも私の嘆きには迚も及ばないだらうから、
君の父上の臨終の時に慰める君がゐなくとも、
その苦しみを慰める兄弟は他にあるだらう。
だが、私のために誰が君に代つて呉れる友があらう！
新らしい友が出來ても君の姿が何うして消えよう？
あゝ誰もないのだ——父上の涙は乾いて消えよう、
月日が經てば何時か幼い兄弟の悲痛も薄らぐだらう、
すべて私さへ除けば他のものは慰められるが、

友に先だたれた孤獨の私の心は何時までも悲愁に沈むのだ。

無題

『棄てゝおくれ、棄てゝおくれ、
おまへの優しい言葉は罪のない人をも迷はせる、
そしておまへは心から思つてゐるのを見て笑ふだらう、
おゝ欺かれた人たちの悲痛はどんなだらう。』

註――これはジヤン・ヂヤック・ルツソーから、實際にあつたことに基づいて、或る伊太利の尼さ、英國の紳士との手紙の中に書かれたもの。

無題に答へて或女に贈る

いとも優しい、純潔な少女よ、
おまへの小さな乙女心を欺かれないやうにする媚びる言葉は、
おまへの想像の中に潜んでゐる――
それは幻に過ぎないものを自らおまへがつくり出したのだ。

人を魅惑するやうな素的な美しさと、
人並すぐれた姿と可愛いゝ顔とを、

ほめて見る人は、おゝ決して！
おまへを欺かうとは思はないだらう。

せめて一度でも澄んだ鏡に寫してごらん、
すれば素的な美しさを、おまへは見出さう、
そは私たち男はほめるに違ひないが、
世間の女たちは嫉妬するだらう。

だから、おまへの美しさを讃める私は、
義理に言ふのではない、ただ男の務めをつくすためなのだ。

あゝ！　この飾り氣ない若者から離れてはいけない、
そはへつらふのでもなく――全く眞實のことを言ふ私だから。

若い處女の死を悼みて

わがマーガレットの墳墓を訪れ、
戀しき人の骸に花束を捧ぐる時、
風は默し、夕闇は靜かに迫り、
木の間にはそよふく風もない。

あゝ！　いとも優しい姿よ、この寂しい穴の中に憩へる君が骸よ、
嘗てはたぐひ稀なる生命の光輝も、

そは犠牲として冥府の天使の冷たい手に捉へられ、
その氣高い心も美しさも彼女の生命を呼び戻し得なかつた。

あゝ！　冥府の天使よ、憐れと思召し給ふて、
この恐怖すべき運命の宣告を破棄することを得させ給ふたら、
今この墳墓のほとりに死ぬやうな思ひで歎くこともなく、
この悲しい調べで、その德を讃へないでもよかつたらうに！

しかし、私は何故歎くのだらう？　彼女のたぐひなき靈は、
太陽の輝く彼方に飛び、

泣き悲しむ天使に導き迎へられて、
無限の樂しさをもて天の樂園で、その德を報はれよう！

然も人の身として僭越にも神を審き、
物狂ほしく神を咎められようか？
あゝ！　しかし、こんな汚れた思ひを棄てゝ、
私は神の御旨に反くことなく從はう。

その德の思ひ出の數々は今も猶ほ懷しく、
その美しい面影は今も頭に殘り、

佗しくも私の切なる情の涙を誘ひ、
わが心の奥深くその影を犇と抱いてゐる。

註——マーガレットはバイロンの初戀の少女で、彼より一つ年上の美しい娘であつた。交ること二年にして彼女は不治の病に侵されて死んだ。當時の海軍大將パーカーの令孃である。

E——に

あなたと私の名が、
親しく結ばれたのを見て嘲笑する馬鹿者には勝手に笑はせよ、
しかし德さへあつたら戀も神聖なものだ、
位ばかり高くて心の汚れたものよりも。

そして假令その運命が同じでなくとも、
その位置があなたより高い身分であつても、

この華美に飾つた身を羨んではならぬ、
あなたは人の知らない隱れた眞實のプライドを持つてゐるから。

私たちの魂だけは、何時もぴつたり合つてゐるから、
たとひその身の運命は拙くとも、私の位置を辱しめることはない、
私たちの交りは永久に變りはない、
身分の違ひは、その身の價値が補ふから。

アナクレオンの戀愛詩

私は手琴の緒をしめて奏でつゝ、
世に名高い人々の功勞と燃える火の歌の調べを、
また山彦のやうに高く響く調べもて、
アトリウスの息子たちが戰場に向つた時、
またテイレのカドモスが遠くにある時、
英雄が劍を鎬り、幾千の國の亡びたのを歌ふ。
しかし、雄々しい戰ひの調べを知らず、

私の手琴はただ戀の優しい歌を彈く。
來るべき時代の譽を受くる望みに驅られては、
私は常に崇高な英雄の名に憧憬れる、
靜まる絃をまた更に奏でて見ると、
勇ましい戰場の歌を奏でるにも、私の琴は適應しい、
私は猛る心に張り切る絃をもて今一度武士の雄々しい調べを、
ジュピタアの偉大な息子のため、
ハイドラを手にかけて野の草を紅に染め、
アルサイデスと、その輝く功勞を歌はうと思ふのだが、
すべては空しく、私の自由な手琴は、

ただ優しい戀の白銀の調べを奏で出づるばかりだ。
さらば、武器を携へた何時の世にも偉大な將軍達よ！
さらば、恐ろしい戰ひの響よ！
それとは異る勳功に私の魂の絃の調べは向いてゐる。
されば今は優しい調べを歌はう。
私の手琴は力の限りを出し盡して、
私の心に已み難い思ひの數々を歌ふ。
戀のみ、ひとり戀のみ私の手馴れた手琴は求めてゐるのだ、」
此上ない幸福な歌の中に、燃える焔の溜息の中に。

エムマに

今尚ほ思ひは盡きないけれど、早やもう最後の時は來た、
かたみに濡るゝ袖と袖、心ならずもわかちゆく、
あの樂しい薄紅(うすくれなゐ)の夢も、今は昔となつてしまつた、
君よ、一度傷けばその悲しさも消えるだらう、
あゝ！　その痛傷(いたで)は如何に悲しく辛からう、
ひとたび袖をわかちては、また逢ふすべもない、
かくも命がけに戀をした私から涙は君を奪ひゆく、

海路はるかに外國(とつくに)の、岸邊を添ふて追ひながら。

さらば！　私たちのあの樂しい時も過ぎ去つた、
私たちの涙にも喜びを混ぜよう、
幼いときのあの昔を思ひ出し、
この古びた塔にも時折は面影を偲ばう。

このゴシックの高樓の上に昇り、
私たちはこの湖の園と谷とを幾度どんなに眺めたらう、
今また同じところに立つて最終の別れに眺め見送れば、

涙にさへぎられてぼんやりと見えもせぬ悲しさ。
おゝ、樂しいあの頃は手に手をとつて駈け歩き、
時の過ぐるのも忘れて遊んだ野邊は何處にあらう、
おゝ、小さい足で駈け廻つては、
疲れたこの身を枕にして憩ふた涼しい木蔭は何處にあらう。
君の假睡（うたゝね）のその間にも私は君の顏に見入つてしまつては、
蠅のたかるのを追ふことすらも忘れてしまつてゐた、
眠つたその眉毛に飛んでくるのをも追ふこともせず、
接吻したいこの幸を如何に恨めしく思つたらう。

滑らかな湖上に君を乘せては漕いだ、
あの懷しい塗つた小舟をごらん、
彼方の森の上に高く搖れては立つてゐる、
幾度か君のために私が攀ぢ上つた楡（にれ）をごらん。

今はその昔も過ぎ去つた――私たちの喜びも消え去つた、
今、君は私をもこの幸多い谷をも捨てゝ行つてしまつた、
この山間を私ひとり踏み分けてゆかねばならぬ悲しさ、
君の姿は見えず、私の寂しさはどんなであらう？

あきらめることも出來ず、別るれば尙ほ思はれる、
この苦しみの切なさを誰が知つて吳れるだらう、
命をかけて戀した人の胸から離れ來て、
永久に逢ふ術もない悲しい別れを告げるとき、

これこそ私たちが辛い辛い哭きのうちの悲しみだ、
流れる涙は盡きもせず、枕は濡れて朽ちてゆく、
これこそ悲しい人生の戀の臨終の極みだ、
おゝ神よ！　愛する人よ、さらば！

M・S・G――に

薔薇のやうな君が唇の私の眼にうつるたびに、
薄紅に匂ふ其の色は慕はしい接吻を誘ふ。
だが、私はこの潔い幸は拒んで棄てよう、
あゝ、若し此の幸が潔い幸でないならば！

君の雪のやうな眞白い肌を夢みるたびに、
その白い胸に觸れたいと思ふことがある。

だが、餘りに大それた願ひは直ぐに消えてゆく、」
その中に住む安けさが逃げようと思ふから。

魂の底を射通すやうな君の瞳の輝きは、
希望に充ちて怖れを制する強い力を持つてゐる。
だが、私はこの戀を隠せと言はれては、
苦い涙を流さずに、ぢつとしては居られない。

私がまだ祕めた心を君に打明けたことはないけれど、」
君はもうこの胸の燃ゆる思ひを知つてゐる。

だから今更ら此の戀を言葉に出して心から、
君の胸の樂しさを亂すこともなからう。

いえ、いえ、幾年を重ねても、私は君を得る時はないであらう、」
神かけて結ぶ緣の妻もないだらう。
神の結ぶ緣の外には私と君の結ばれる、
緣の糸はないだらう、あゝ戀しい人よ。

だから祕めた焔を思ふがまゝに燃やせ、
燃えては消えるに任せよ、君にも知らせずそのまゝに。

運命はどんなに悲しくとも、ゆめゆめ避けようとは思はない、」
ひろげた罪深い此の胸の焰で君を燒かうより。

たとひ思ひはつらくとも、うるんだ君の瞳から、
鳩の眼のやうな柔和さを、求めて安きを願はない。
このやうな悲しみをあの人の優しい胸に送るより、
私の思ひはただひとり胸に祕めては痩せほそる。

ではもう、これからは君の優しい唇を、
自分のものとするのには、私は火をも水をも厭はない。

君と私の純潔を永久に保つその爲めに、
今日を限りの別れを告げよう、戀人よ。

さうだ！　これからは君の美しい胸に、
もう永久に望むまい、君の優しい接吻を。
自分のものとするのには君の不滿のその他は、
世の人の罵詈すらも私の心は恐れない。

思ひのまゝにならぬ世であるが、君に罪はつくらせない、
口のうるさい世の人に君を何うして罵詈（そしら）せよう。

たとひ私の身の上に思はぬ傷を受けるとも、
戀にその身をさゝぐる君を殉教者にはしないつもりだ。

カロリンに

思ひ煩ふ戀人よ、いと美しい其の眼に、
涙を溜めてゐてくれと私が告げたと思つてゐるの？
その切ない溜息は言ふに言はれぬほどの、
言葉が籠つてゐるのに私がぢつと冷かに聞き流してゐると思つてゐるの？
戀も望みも二つとも挫かれてしまつたとき、

おまへの涙は切ない悲しみを現はしてゐたが、——
それでも戀人よ、痛手を負ふた私の胸は、
それに劣らぬほどの悲しみに打ち沈むのだ。

しかし苦しい惱みに私たちの頰が紅に染まる時と、
花のやうなおまへの唇と私の唇とをふれ合せた時ばかりは、——
私の眼から流れ出た涙は、
おまへの眼から湧いた涙と共に解けてしまつた。

おまへが氣づかずに通り過ぎた思ひに燃えたこの頰を、」

おまへは湧き出る涙で焰を何時か消してしまひ、——
そして優しい口元から語り出さうとした時は、
微かな溜息のうちで私の名だけを呼んでゐた。

しかし、私たちは今悲しんだとて何にならう、
二人の運命を今更ら歎いたとて何にならう、
これから先は思ひ出ばかりが殘るのだ——
しかし、それが爲めに二人の悲しみはもつと增してくる。

戀人よ、ではもう一度、改めて別れを告げよう！

あゝ！　若しこの悲しみに打ち勝つことが出來れば、
過去の樂しい夢を思ひ出さずにゐられたら——
ただすべては私たち二人が、その幸福を忘れることだ！

ある女へ

——カモーエンスの詩を添へて——

この惱める胸の遣瀬ない戀の誓ひをば、
愛する少女よ！　私のために祕めておくれ。
そは詩人の戀の美しい夢の歌で、
世の人々を魅する讃歌だ。

嫉み心の深い愚かな人や、失戀した老嬢（オールドミス）のやうに、

寂しい運命を負ふて生れて來た、
心の汚れない淑女を除いては、
誰が何うして咎めよう？

ねえ、眼を通しておくれ、愛する少女よ！心をこめて讀んでみておくれ、
そんなに貴女は淺ましい女とは思はないから。
惱める詩人を哀れに思ふて、
その心を告げてくれても無駄ぢやない。

カモーエンスこそは、眞の詩人だ、
あの人の胸には激しい戀の焔が燃えてゐた。
あのやうな戀こそは貴女の得べきものだ、
だが、あのやうな悲しい運命は貴女の上に來ないやうに。

註——カモーエンスは葡國の詩人で、養育院で不幸な生活を送つた彼の詩は、バイロンの最も好んだものである。

戀の初めての接吻

仇な物語りのやうな君の拵へごとを捨てておくれ、
そは愚かな心から紬ぎ出した拵へ物の布なのだ。
君が心の底から出る優しい眼の光をば、
戀の初めての接吻として歡(よろこ)びを與へておくれ。

君たち平凡な詩人よ、その胸は空(あだ)な思ひに燃え、
その平凡な情熱は森を歌ふのに恰度いゝのだ。

若し君が戀の初めての甘い接吻を一度でも味ふことが出來れば、
眞に尊い感激から君の詩は湧き出るだらう。

若しアポロの神が大きな救ひを拒(こば)み、
またミユーズたちが君等に反抗しても、
その時は神々に永久の別れを告げて、
戀の初めての接吻の力を試して見るがいゝ。

私は今それを憎む、冷酷な藝術の造化を、
たとひ世の貞節振る女たちが私を罵り嘲るとも、

戀の初めての接吻の歡喜に高鳴つてゐる、
心から湧き出る清い泉を私は欲しいのだ。

おまへたちのやうな羊飼や羊の群よ、その樣な空想的な詩は、
人の興味をそゝるだらうが、人の心を動かすことは出來ない。
アルカヂアは、ただ夢の國を現はすのみで、
戀の初めての接吻の樂しさに比べたら、そんなものが何にならう。

あゝ！ 世の人は遠いアダムの昔から今日が日まで、
哀しみと戰つて來たと言つたとて何にならう。

樂園は今も尙ほこの地上に殘り、
エデンの園は戀の初めての接吻の中にこそあるのだ。

年月は山鳩が羽を揃へて飛ぶやうに過ぎ去り、
年老ゆるに從つて若い血は衰へ、私たちの快樂は消えても、
いと樂しい思ひ出こそは何時までも心に殘つてゐる——
私たちの戀の初めての接吻の樂しい思ひ出こそは……。

斷章

——戀人チヤワースの結婚直後の詩——

草は枯れ、眺め荒れ果てたアンズリイの丘よ、
惱み知らぬ幼き日に私は、
如何に吹く風と北方の嵐に、
脅かされる並木の中を彷徨(さまよ)つたらう——

今はもう在りし日の如く、時の愁ひも忘れてしまひ、
親しい眺めの山河も再び見得る日もなく、

今はもう優しいメリイの微笑むのを、
早や樂園とすることも私から遠ざかつた。

M——に

おゝ！　美しいその瞳が熱い焔に燃えもせず、
光りと優しい情けに輝いたら、
たとひそれを見る人の胸に起すやうな望みは小さくとも、
死よりも勝れてゐる戀はおまへのものとならう。

君のやうに世にも稀な美しい姿を持つてゐたら、
よしや君の眼がどんなにきつく光つてゐるとも、

私たちは賞め讃へよう、だが望みは絶たねばならない、
その恐ろしい君の眼は私たちの狎れた心をよけるから。

自然がこのやうに君を愛らしい姿に生んだ時、
玉のやうなその光りが君の身から輝いたから、
地上に置くのには貴いと神は君を望まれ、
若しも天に招かれたら何うしようと思はれたのだ。

だから天使たちは、爭ひ奪ふのを恐れて、
その愛兒を御手に護るため、

神々しくも輝く、その眼の底の、
鋭い光に旨を含めて、ぢつと隠れるやうに宣べ給ふたのだ。

君の瞳が晝の日光のやうに輝く時、
恐怖を知らぬ天に住むスフィルフすら、恐れ戦くだらう。
君の姿の美しさを見ては心の迷はぬものはない、
だが、誰がその燃ゆるやうな瞳をぢつと見得るものがあらう？

輝く星にまじるベレニスの香ふ髪は、
空の殿堂を飾るとは言ふけれど、

星は妬んで君が空に昇るのを許すまい、
君の瞳の光は七つの星にもまさるので。

君の眼が星となつて天をめぐつたら、
無數の星は恥ぢて姿を消すだらう。
空のすべてを統べる太陽も、
光は薄らぎ、いと微かに瞬くやうになるだらう。

若い女に

あゝ美しい娘よ、耳を裂くばかりに飛ぶ彈丸は、
愛らしい君の微笑を崩すばかりに物凄く、
愛らしい頭の上に恐ろしい音を送り、
優しい胸に豫期せぬ恐怖を更に抱かせる。

このやうな美しい君をそつと覗いて、
嫉みに心は燃え、禍ひ多い魔の手が、

最初に狙ひをきめた道からそれたのだ、
彈丸を向けてひたすらに君の身近に寄せたのに。

恰度今だと思つた危いその時に、
彈丸は地獄から生れ來た禍ひの手にと落ちたのだ。
しかし畏い神の手は不憐に思ひ、
憐れみを與へ給ふてか迫つた死を去らせ給ふた。

けれど思はず落ちてくる涙の露の一滴(ひとしづく)は、
怪しく慄ふ君の胸に落ちてくる。

手は下さぬけど早や月影宿る露のやうに、
輝く君の瞳から思はず流れ出された。

あゝ！　どんな苦行も君にしたやうな、
許し難い罪を贖ふことは出來ない。
君に寄り添ふ美の神の玉座の前に座し、
罪を責めて君はこの私にどんな罰を宣給ふのか。

私が若し君に許されて裁かれなかつたら、
歎きの涙もなく下す宣告は、

その昔君の手に抱かれたのを、
元の戀人に返せと言つてゐるのだ。

これから後は儘ならぬ身となることが、
犯した罪は小さくとも贖ひとなるのだ。
これからはただ君のため生くることを覺悟しよう、
君より他には此世で私の心の所有者になるものはないから。

しかし、君は今私の重い罪の贖ひを、
取除かうと思ふこともあらう。

君よ、その時は身に沁む徴戒を選んでおくれ、
死も亦よからう、または思ひ向くままに。

さあ、選んでお呉れ！　如何なる恐ろしいことも私は神かけて誓はう、
しかし君よ、待つておくれ——ただ小さな言葉もつゝしんでおくれ！
何と仰せられるとも追ひやることはしないがいゝ。

戀人に

黄金色の君の髪を此の紐で結んだのか、
戀の誓ひで私の愛する戀人よ、
天に在す神の遺された寶だと、
私は永久に愛(め)でながら心の中に祕めて置かう。
君の心と私の心が結ばれるものなら、
肌身につけて誓しも離さずにるよう、

一生この身から離すことなく祕めて、——
私の死後にまで身につけてゆかう。

花の香に匂ふ唇を吸ふのは嬉しいが、
この紐に比べると懐しさは劣るのだ、
そは暫しでも見られる甘い夢だから、
ただ束の間の喜びを味ふに過ぎないが。

そは君と私が幾年を重ねて後老ひの日の、
迫つた後も若い日を偲ぶ草となるだらう、

思ひ出の日影に照らされて萠え出ることを望んだら、
戀の葉は何時までも緑ゆかしく匂つてくる。

黄金(こがね)色に照りはえて、ゆるやかな輪をつくつてゐる、——
あの優しく搖らいでゐる小さな髮の毛よ、
おまへの育てたあの人を神かけて只管に、
地上へ離してよからうか、たとひ四つの大陸は迫つて來ても。

燒けつくやうな暑さのコンムビアの南の涯の空の色や、
晴れた朝を金色(こんじき)に染めた日光のやうに、

おまへはその昔を照らすだらう、だから光り輝く額を、
その他のもので幾重にも飾つたとて何にならうか。

メヂアの歌

美しい戀の火が燃えるのに馴れたこの胸も、
強い思ひに責められては、
人の憂ひの海の上を怒り狂ふ荒波の、
山のやうに崩るゝ勢ひを挫く心があらうか。
人の讃め得る望みも世の恥辱を受ける恐れも、
痛手に重い胸を起す力はない、
燃えるやうな慾も、罪の赤い焔も、
この胸の嘗て抱いた希望を悉く燒き盡さないでは置かない。

しかし、若しも優しい純な夢で、
優しい魂を言ひ知れぬ情で動かして呉れたら、
人の子の病を治す靈藥は、
戀に醉はせた若人の惱みを慰める。
美しい女神よ！　若しおまへが生れた天國から、
姿を變へて地上に降りて來たら、
神々の降し給ふ惠みを、
何うして無情にもいやしまうか？

しかし、おまへの手に引く黃金の弓から飛んでくる、
白羽の矢で私の息の吐絕えないやうにしておくれ！
矢尻の毒は何時か胸に忍び入り、
すべてを燒き盡す恐ろしい火を燃やすから。
おまへたち愚かな疑ひよ！　妬ましい心づくしよ、
心の中の戰ひで互ひに鎬ぎをけづれ、
湧き出る淚の種となる悔恨よ、
永久に私の胸から遠く去つてゆけ！
心にもない煩ひで破つてはいけない！

神聖な戀の思ひを、
時は喜びの翼を打ちひろげて、
眞面目な若人の眞情の上を翔けてゆく！
美しい女神よ！　ミルテの茂つた樂園で、
私が戀人と密かに歎くのを許しておくれ、
そは純な彼女の心が私の心と結び合つて、
いつまでも私の傍から離れないと契ふから！

私の故郷よ！　私は昔も愛したけれど、
今は昔より更に平和な家のやうに戀しいのだ、

あの故郷の岩の聳え立つた海岸を忘れることは出來ない！
この身は夢のやうな漂泊をつゞけてはゐるけれど。
私は今日でも、また今でも、
この果敢ない生命を棄てゝもいゝ！
だが、靜かな故郷に生命を捨てるのは今は悲しい、
そは死よりもほんとに苦しい運命だから。

私は故郷を逐はれた人の溜息をも聞かないだらうか、
見知らぬ旅人が忍び音に泣く涙を見ないだらうか、
妻子に別れ親を捨てゝ海山遠い外國を、

西や東に彷徨（さまよ）ふてゐながらも！
あゝ幸薄き女よ、おまへを悲しんでくれる親もなく、
哀れなお前の運命を嘆く友すらなく、
他人の家を訪ねても、
おまへを喜んで迎へ入れる聲さへもせず。

愛情もなく、優しい情をも知らない、
薄情な心を持つ惡魔は悲慘な死を遂げよ、
嘗て愛した女さへも今は憐れと思はず、
捨て去つて泣き泣き一人去らしめるのだから。

白銀の鍵を手に持つて、
美しい寶をも自分の胸に祕めて置く惡魔よ――
そんな薄情な友なら遠く離れてゐた方がいゝ、
そして涯ない海原の嵐と共に遠ざかつて行け。

ダミキタス

國の法律では、　すべて嬰兒だ。
年こそ少年だが、心はすべて何れも喜びの奴隷、
恥を知り德を重んずる心は悉く失はれて、
欺瞞に充ちた人は僞りの惡魔だ。

幼くとも僞りに充ち、變り易い風のやうに性質は粗暴で、
女を瞞し惡友と交り學校を出ずして世の中の惡事を覺え、

ダミキタスが罪惡の迷路から拔けて、
世人の中へ駈け出した時は人生の終りを見出した。

しかし尚ほ心の中の戰ひと、
激しい情は魂を搖り動かし、
彼に命じて快樂の盃を、
殘りなく飲み干せと命ずる。

だが、不德に浸つたまま、
彼は昔の鎖を破り、

一度は此上ない物も、
今は恐ろしい毒のやうに思はれる。

涙

愛や友のなさけが私たちの心を動かす時、—
眞實がその眼の中に現はれる時、
唇は嘲と笑ひとで巧みに欺いても、
愛情の眞僞を試すものは涙ばかりだ。

微笑が憎みと恐れを隠し、
僞善者の企らみであることが餘りに多いのは悲しい、—

心のまゝを語る眼が暫し涙で曇つたら、
優しい溜息を與へた方がいゝ。

溫和な慈悲の光明は地上の人々に、
美しい魂の姿を見せ、
憐れみはこの德の感ぜられた場所で融和し、
その滴りが涙となつて混り合ふのだ。

荒れ狂ふ暴風に帆を上げて走り、
山のやうな波を凌いで太西洋の中に船をやる人が、

間もなく自分の墓となる荒波を見下ろす時、
碧く珠のやうに光る波は涙と一緒に輝く。

光榮に輝く生涯に、
此上ない譽を得ようとして勇士は生命を捨てるのも恐れない。
しかし戰運つたない敵が倒れたときは抱き起して、
涙で傷のすべてを洗つてやる。

血に染んだ鎗を投げ捨てゝ、
胸の高鳴る威丈夫の誇りもて花嫁の許へ歸り、

愛する妻を抱いて兩眼から流れる涙を接吻する時、
戰ひの勞苦は報はれよう。

あゝ、わが青春のなつかしい場面よ！　情愛と眞心の故郷よ！
飛びゆく年月を忘れては戀を追ひ、
おまへと別れるのを厭ふて泣いて見送らうとしたが、
兩眼は涙に曇つて、ほのかにその姿が見えただけだ。

たとひ私はメリイに誓ひを話すことは出來なくとも、
嘗ては私の深く愛したメリーが、

涙ながら人なき四阿屋（あづまや）で、
私の誓ひに報ひてくれたのを思ふ。

メリイよ！　だが、お前は他の男の妻となつて、
永久に變らぬ幸福にしてゐておくれ！　今尙ほ私はその名を敬ふ、
以前には私のものと思つたおまへを私は歎息しながら讓り、
そして涙ながらおまへの罪を赦さう。

おゝ私の心からの友よ、今別れるに臨んで、
私の胸には切なる願ひがある。

若し遠く離れた此の田舍で再び逢ふことが出來たら、
別れた時のやうに涙で互に相見よう。

私の魂が永久の死の國へ飛んで行つたら、
私の骸は棺の車の上に載せられる、
私の屍の朽ちてなくなつた墓の傍を通ることがあつたら、
おゝ！　せめては涙でその墓を濡らしておくれ。

虚榮の子の競ひ建てた大理石の石碑は、
悲しみを現はすには適しない、

空な名聲で私の名を飾つてくれるな、
私の求め望むのはただ一滴の涙なのだ。

思ひ出

おゝ、すべては過ぎた、
夜な夜なの夢に見た日より、
輝く希望は既に、
私の前途を暗くした。

振り返つて見ると幸福な日は少く、
木枯は吹き荒み凍りて色も失せ、

私の一生の春のやうな、
曙の空は次第に曇る。

愛と望みと喜びに、
別れを告ぐる時にも、
過ぎた昔の思ひ出は、
恨めしくも附き纏ふ。

エリザに

エリザよ、その魂は、
來世までも生きてはゐないと、
回々敎のものどもは、
冗談のやうに言ふ。

だが君よ、彼等は、
君を見ると過失を、

悟つて直にその敎へを、
改めようと思ふかも知れない。

若し敎祖が僅かでも、
正しい悟りを得たら、
樂園の女ばかりを、
追ふこともなからう。

あの卑しいみことのりは、
女神でもない世の中の、

女ばかりの住むやうな、」
許しを與へるためだらう。

だが、女の禍ひを、
加へるためにその身から、」
魂を取り去るのみでは、
心の不滿ばかりだらう。

そして一人の男子に侍けと、」
女四人におしつけるのだ、」

魂はなくても間に合ふと、
どうしてそれに耐へられよう。

その宗教は男子にも、
女にも惠みを與へるものではない、」
男子には辛いことだが、
女の身は更に哀れだ。

だが、永く傳へて來た、
言葉には私もそむかれない、」

『女は天使であるが、
結婚は悪魔だから。』

マスターズ夫人へ

嘗て一度はこの誓ひがしるしと見えたやうに、
おゝ！　若し私の運命があなたの運命に結ばれたならば、
私の胸の安けさは破られることもなく、
あのやうな馬鹿なことはしなくても濟んだらうに。

私の若い折に犯した罪を、
年老ひた賢い人たちは口を揃へて責めてゐる。

あの人たちは私の罪を知つてはゐるけれど、
あなたが私との縁を裂いたのだとは知らないだらう。

嘗ては私の魂もあなたのやうに純潔で、
燃えてゐる幾つかの焔を消す力は持つてゐた。
しかしあなたが他の男と一緒になつたとき、
あなたの誓ひは破れてしまつたのだ。

あゝ　私にも戀敵の男の平和を破つて、
未來の幸福を奪つてしまふ力はあるが、

ただ愛しいあなたの爲めに心から憎まず、
仇し男の幸を祝福して喜ばせて置かう。

あゝ！　天使のやうな優しいあなたの姿を見失つた日から、
私の心はつひぞ休まるところがなくなつた。
だから、せめては、あなたにのみ求めてゐたすべてを世の多くの女
に、
見出さうとしてゐる私の寂しさを哀れと思つてくれ！

さらば！　仇な女よ、

今はもうあなたを恨んで見たつて無駄なことだ、
思ひ出も望みも今は何にならうぞ、
ただプライドだけが、あなたを私に忘れさせるのだ。

しかし夢のやうに過ぎたこの幾年月よ、
興覺め果てゝ物憂さを誘ふこの盃よ、
いろいろな戀よ、年老ひた女の心づくしよ、
胸に燃ゆる戀の調べに合はす心にもない歌よ。

若しあなたが私の戀人であつたら、すべてのことを鎭めたであら

う！
若い折の快樂で蒼ざめた私のこの頬も、
燃える熱情に焔の再び燃えることもなく、
靜かな家の中で色づき匂ふたであらう。

昨日までは大きな自然も、あなたの前で微笑んでゐたから、
田舍の風景もいと樂しく眺められた。
そこで私のこの胸は僞りを厭ふてしまつたのだ——
何故なら昨日まではあなたを讃めるために胸が躍つてゐたから。

しかし今となつては、あの喜びをも捨てゝしまはう、
過去の日を思ふと私の心は狂ひさうだ。
何も心に考へない人たちの中にまじつて空騒ぎをしながら、
私の胸の悲しさを忘れてしまひたい。

しかし、このやうに人の中に混つて忘れようとはするが、
一つの思ひは何時か時を盗んで忍び込む――
あなたが永久に私のものでないことを氣づいたら、
私の胸の遣瀬なさを魔神も憐れむに違ひない――

註　このマスターズ夫人こそは、昔の戀人チヤワース孃である。

後年の詩より

或る處女へ

愛する處女よ、私のために、
あなたは思ひ煩つてくれるでせう、
惱みやつれるこの胸の、
純な戀の契りを。

そは詩人の妙へなる、
歌の調子に讃へられて、

世間の人を魅惑する、
エロスの夢を歌ふからです。

嫉妬心の深い、
粋人は戀を得ず、
年老ひた婦人のやうに、
哀れにしなびます。

運命を負ふて生れてきた、
賢くも装ふた、

心の汚れた人でなく、
どうしてこれを咎めませう。

涙を通して、
心を込めて讀んでごらん、
あなたはそんなに卑しい、
女ではないと思ひます。

惱み煩ふ詩人を、
哀れに思ふなら、

この心をあなたに打明けたら、
ちつとは同情してくれるでせう。

あの人はほんとうに、
詩人でした、おゝ君よ、
あの胸には激しい焔が、
いつも燃えてゐたのです。

その愛はほんとうに、
あなたの受けるものでした、

おゝ哀れなあの人の、
運命があなたの上に來ないやうに。

二人が別れる時

黙つて涙ながらに、
　いつ逢へるかも分らぬのを、
言ひ知れぬ悲しみを抱いて、
　私はお前と別れたとき、
お前の頰は蒼ざめ、
　お前の接吻はさめてゐた。
あゝ今の悲しみこそは、

　そのときに分つてゐたものを。

朝の露がぽつたりと、
　私の額に冷めたく落ちて來た——
それはこの私の今の悲しみを、
　先に知らせておいてくれたのだ。
お前の約束したことも破れ、
　お前の誇りもなくなつた。
お前の名を呼んでるのを聞けば、
　私はどんなに恥しい心地がするだらう。

私の前で他人がお前の名を言ふと、
　そは私に葬式の鐘のやうに聞え、
私は思はず身ぶるひした――
　どうして私はこんなに戀しいのだらうか？
他人は二人のことは知つてゐなくとも、
　私はお前を知つてゐる――
永久に、永久に私はお前のために悲しむ、
　話すには餘り切ない悲痛だから。

人知れず二人は逢ひびきをした――
　物も言はず私は愁ひに沈んでゐる。
お前の心は私を忘れ、
　お前の魂は私を欺いてしまつた。
長い月日の後で、
　若しお前に逢ふことがあつたらば。
お前に何と言つたものだらう――
　ただ物も言はず涙ぐむばかり。

お前は幸福だ

おゝ！　お前は幸福だ、
私も幸福だ、
私の心は今でも變らずに、
お前の幸福を祈つてゐる。

お前の良人は幸福だ――私より幸福だ、
だが、幸福なその人に逢ふのは苦しい、

だから、苦しみもそのまゝに――あゝ！
若しお前を愛して呉れなかつたら、私はあの人を憎むかも知れない
よ。

過ぐる日にその幼兒を見て、
嫉妬で胸も張り裂けるやうな氣がしたが、
何にも知らない幼兒が、につこと笑つたその時に、
私はお前が懷しくて接吻をした。

私は幼兒に接吻をして――その顏が、

父親に似てゐるのを見た時に、私は溜息をすら押さへつけ、
ふと母親そつくりの眼附を見出して、
いつか深い愛着にとらはれた。

メリイよ、さらば！　私は別れねばならない。
お前の幸福な間は私も心づかひはしない、
だが、お前のところに私は何時までもゐることは出來ずとも、
私の心は直ぐにもお前のものとなるかも知れない。

時と私のプライドは、

私の幼い時分の戀の焔を消したとは思つたけれど、
お前の傍らにゐると、
私の心は望だけを捨てれば以前と變らない。

現に私は落ちついてはゐるが、
以前はお前の傍では胸が躍つてゐた、
思へば、それすらも罪なのだ、
二人は胸のときめくこともなく、平氣で逢つてゐる。

お前は私の顏を眺め、

私は平氣で二人共顔を見かはしてゐる、
お前は私のたつた一つの心に氣がつくか、
絶望の後の寂しい落着きに。

行つておくれ！　行つておくれ！
幼い日の夢を追ふことなく、
おゝ！　傳說のレーテーの忘却の川は何處ぞ？
この愚かしい胸よ、靜止せよ、さなくば張り裂けよ。

註　これはバイロンの昔の戀人チヤワースの結婚後に、彼が其の家に招待された時の詩である。

別離

愛(いと)しい處女よ！　あなたの唇でした接吻は、
今よりも幸福な時がめぐり來て、
この贈物を淸らかに、その唇に返す時まで、
私の唇を離れることはないだらう。

いと優しいあなたの別れの時の眼つきは、
思ひわづらふ戀人の方へ向き、

あなたの眼（まなこ）から、はふり落ちる涙は、
私に心變りのしないやうにと止（と）めどなく。

ただぢつと瞶めたばかりで、
私を幸福にする契（ちぎ）りをして呉れない。
そしてあなたのことばかり考へてゐる、
心のためには一つの形見さへ呉れとも言はない。

私は書きたくもない、
これを書くのには私の筆は弱々しい。

おゝ！　この思ひを語ることが出來なかつたら、
どうして言葉が役に立つだらう？

晝も夜も嬉しい時も悲しい時も、
遣瀬ない戀の惱みを祕めて、
あなたの爲めにぢつと默つて、
苦痛に耐へねばならぬのだ。

戀の始めを訊かれて

戀の始め！　おゝなんて、
あなたは酷い質問をするのです、
あなたの姿を見るたびに、
大抵の人の眼に戀が生れてくるのです！

それから戀の終りをも知りたいなんて！
心は止めてきかない時でも、恐れることもなく――

戀は靜かな悲しみのなかを彷徨して、
私の生のある限り生きてゐます。

永久に戀するを得ば

戀が河の如く、
永久に流れて、
時のいそしみさへ、
空しからば——
戀に勝れる、
樂しみはなし。
寶の如く其の鎖を、

人は確と掴む。
されど人の愁ひは、
死に盡きせず、
翔けゆく爲めに、
そが翼を戀は飾れり。
それゆゑに、
戀は暫しの時節にて、
然もそは春にふさはし。
いと愛しき人の別離には、

心は悶え、
望みも早や失せて、
死をこそ願はん。
二年も前にしあらば、
あゝ！　如何に冷やかに、
愛しき人に、
望まれん！
互に契りかはせし其時は、
雨や風の日も、
戀の翼より、

羽を引き抜きぬ、
春過ぎて、
羽の失せにし其時は、
哀れに歎けど、去りゆくすべもなし。
統べゆく玉の如く、
その生命は輝けり、
そは威權を縛れる、
ただ名のみの契りこそは、
その光榮をも落し、

既に榮華の夢も覺め、
自らの地を、
心に蔑み棄て去れり。
されど進みつゝ、
旗押し立てゝ、
威力を揮ひ、
進みゆくこそ好ましき——
憩ひに飽き果て、
隱れては滅びゆき、
戀は衰亡の位置へと落ちゆかん。

年月は去り、
快樂の夢より、
覺めし如く、
戀人よ！　待ち給ふなよ
互に二人して、
戀の衰亡を憂ふる其暇に、
憤りと罵詈にて、
あらゆるものは憎みに變りゆく——
最初は衰へ果てても
悉く亡ぶることなく、

あらゆる情に惱まされ、
痛手を負ふまで待つなかれ。
一度衰へし其の時は、
戀の權利は盡き果てし——
そは情もていさぎよく別れるこそ好ましき。

かくも情愛は、
歡喜を呼び、
優しき抱擁を、
思ひ出さしむ。

疲れ果て憎み、
君の情は止み、
飽く時の來るまで、
君は待たざりき。
君の最後の抱擁は、
冷膽の姿を殘さず、
優しき顏に、
昔も今も變りなく、
君の優しき、
魔の鏡の如き眼は、

ただ歡喜を映して最後までも續き得ず。

別離の悲しさは、
忍ばれず、
如何なる失望が、
別離より生ずらん！
されど尙ほ殘りても、
一度は蒼惶として、
その獄屋に反き、
心を結ぶものならん？

時は戀を飽かしめ、
使ひ果てなば戀を傷く。
翼ある戀の子は、
ただ子の歡喜となり――
そはたとひ銳く短くとも、
君の歡喜を失ひ、
戀の苦しさをこそ知るなれ。

二人はもう彷徨しない

I

こんな夜更けまでも、
二人はもう彷徨しない、
心は今も戀ひこがれ、
月は今でも照つてゐるけれど。

II

劍はその鞘のなかに、
魂は心を疲勞させ、
胸の動悸はほつと息つき、
戀と憩ひの時が來たからは。

III

夜は戀のために與へられ、
晝はまた返つてくるが、
二人は月の輝きの下で、
彷徨ふことはない。

彼女は美しくして歩く

I

雲のない國や、星の多い夜の空の如く、
彼女は美しくして歩く、
闇と光のすべては、
彼女の姿と眼に集注され、
祝ひの日にさへ空には與へられぬ、
あの美しい輝きの中に這入つて行つた。

II

影は一層濃くなるが、光は一層薄らぎ、
漆の如く眞黒の髮の毛をなびかせ、
また彼女の顏に照りはえ、
世にたぐひない綺麗な姿を汚した、
彼女の顏には純な優しい心が、
おだやかにまた綺麗に現はれてくれる！

III

あの頰とあの額に、
優しくて、おだやかに且つ美しく、
浮び出る微笑と、艶やかな色は、
樂しい過去の日の夢を思はせ、
その心はあらゆるものゝ中に融け、
その愛は純情なものになつてゐる！

私の心は暗い

あゝ　私の心は暗い！
だが私は打ふるふ竪琴の糸の音を耳にする、
しなやかな君の指で私の耳元へ、
とろけるやうな音を彈いておくれ。
私の胸に若い望みがあるならば、
その音は重ねて望みを招いてくれるだらう。
若しも私の眼に涙を宿すことが出來たら、

この胸の焔を洗ひ流して消しておくれ。
だが歌の節が狂ひ、また變るやうだつたら、
その喜びの節もやめておくれ。

戀人よ、私は涙を流さねばならない、
さうでもしなければ、このふさいだ胸は張り裂けてしまひさうだ。

この胸は悲愁のために養はれ、
眠り得ず默々のうちに久しく惱まされてゐるために。
然も今私の心は不幸の限りを味はねばならないのだ、」
あゝこの胸を破らうか、また歌ひ出さうか。

私はあなたの歎くのを見た

I

あなたの嘆くのを見てゐると、
その青い眼から、
大粒の光つた涙が落ちてくる、
そは菫から滴る露のやうだ。

あなたの微笑むのを見てゐると、

あなたの傍に寶玉も恥ぢ入るやうに光りを止めてゐる、
艶やかに輝く美しいその眼附には、
どうしてその光が及ばうか。

II

落ちゆく陽の光りは夕べに迫りくる影を追ふてゐる、
美しい深い色を夕雲が湛へるやうに、
晴れぬ心もあなたの微笑からは純な喜びが分たれる、
日光が輝きを尚ほも心に殘すやうに。

ヘロッドの悲しみ

I

おゝマリアンネよ！　今君の爲に、
君を傷けた此の胸はかきむしられる。
復讐も苦痛のうちに失ひ、
憤りも今は返らぬ悔ひとなつた。
おゝ、マリアンネよ！　今君は何處にゐる？
君は早や私の悲しい懺悔をも聞いてはくれないのだ。

あゝ！　若しも君さへ聞いて呉れたなら、神は私の祈りを聞いて
下さらなくとも、
君は私を許して呉れように——。

II

あゝ、君がこの世を去つてから——
私の狂ふやうな心を誰も慰めてはくれないのだ、
そして私の憤りは自ら身の絶望に陷り、
今、君を傷けた刄は私の頭上にゆらめく——
しかも私のために死んだ戀人よ、君はもう冷たくなつてしまつて

ゐる！
かくてこの憂ひに沈む心は夢のやうに、
生かして置くにも足らぬ私を一人殘して、
高く天に飛び去つた君をあこがれてゐるのだ。

III

曾て私と共にゐた君はこの世を去り、
私の歡喜をも葬り去つた。
ただ私一人のために咲いた花をば、
私はユダヤの墓から奪つてしまつたのだ。

私は罪人だ、否、地獄だ、
この心の荒みゆくのも運命だらう。
消すに消されぬ此の惱みこそは、
あゝ　自ら致した苦しみだ！

註　マリアンネはヘロッド王の后で、王の嫉妬から不義の嫌疑をうけて殺された稀世の美人であつた。王は后を殺して後、彼女の亡靈に襲はれ遂に悔恨に苦しみ發狂したのであつた。

妻と別れるに際して

おゝ　さらば！　永久に、
何時までも御機嫌よう、
私はおまへを許さぬとも、
私の心はおまへを憎むことはないだらう。
おまへが何時も頭を凭れさせてゐた私の胸に、
早やあの時のやうにすることは出來ないだらう、

静かな眠りの日が來る時、
おまへが再び見ることを得るこの胸に！

おまへが艶やかな眼で一目見てすら、
この胸は深い思ひを見せるのだ！
それなのにつれなく別れてゆくのが、
惡いかは今におまへにも分るだらう。

たとひ世間の人がおまへをおだてゝも——
私の受けた恥を笑ふとも、

人の悲しみに基づくものなら、
その言葉はおまへの氣を惡くするだらう。

然もいろんな過ちが私を傷けても、
取り返しのつかぬ痛手を私に與へるには、
私をば嘗ては抱いた、
その腕より勝れたものがあらうか？

あゝ！　然しおまへは自らを欺いてはならぬ、
戀はやがて衰へるけれど、

不意に別れた悲痛で、
こんなに心の苦しめられるとは思はなかつたらう」

おまへにはまだ生命がある、
たとひ血に塗られても私は生きる、」
そして何時も胸の悩みで——
二人はもう逢ふこともなしに。

そは死の嘆きよりも、
もつと深い悲痛なことだ、」

二人は生きてゐても、
毎朝さびしく床の中で眼覺めねばならない。

おまへは慰安を求めて、」
あの愛兒が話し出すとき、」
私といふものを棄てながらも、」
おまへはあの子に『父さん！』と教へるつもりか？」

あの子が小さな手でおまへに倚りかゝり、」
その唇をおまへの唇につけるとき、」

おまへの幸福を祈る私をば、
祈つてくれ、おまへの戀の幸を願ふ私をば。

若しもあの子の顏が、
もう再び逢ふことのない私に似てゐたら、
おまへの胸は私を思ふ煩ひで、
しづかな動悸がするだらう。

私の過ちはおまへがすつかり知つてゐるけれど、
私の心の狂ひは誰も知らないだらう、

私の望みは破れてしまつても、
おまへとは決して離れない。

あらゆる思ひもくづれ、
世に負けなかつた私のプライドは、
おまへに負けて、その手で棄てられた、
今は私の魂さへも私を棄て去つた。

だが萬事は休すだ――すべての言葉はもう駄目だ――
私の言葉はもう駄目だ、

二人の已むを得ない思ひは、
意志もないのに現はれた。

さらば！　こんなにして別れ、——
すべての絆は斷ち切られ、
胸は燒けてさびしく荒み果てた、
あゝ私は死を選ぶのみだ。

註　この詩は、バイロンがミルバン孃と結婚して一年の後、一子エイダを妻が連れて別れた時に作つたもので、其後彼は永久に故國を去つてしまつた。

『チャイルド・ハロルドの廻遊』より

別れの歌

(1) さらば

さらば、さらば！　故郷の海邊は、
波路青く遥かにも薄く消えてゆく。
微風はそよそよと波は立たず、
鷗はさわがしく啼き叫ぶ。
西の方に沈む夕日を追ふやうに、
私たちも亦急ぎゆく。

さあ夕日にも別れて行かう、
　さらば、わが故郷よ。

(2) 暫しも休むひまなく

暫しも休むひまなく、
　明日も亦、太陽は出で、
海と空と私たちとを迎へるけれど、
　わが故郷は影すら見ることは出來ない。
故郷の家には人氣なく、
　爐の火さへ消えてゐるだらう。

葎は壁に生ひ茂つて、
　門邊に犬が寂しさうに吠えてゐるだらう。

(3) 幼きものよ

幼きものよ！　さあ、こゝへお出で、
　どうしてお前はそんなに泣いてゐるの？
荒れ狂ふ波が怖いのか、
　暴風にそんなに震へてか？
さあ、その眼の涙をお拭き、
　これは迅くて丈夫な船だから。

迅速なので威張れる手なづけた鷹でも、
　こんなに愉快には飛ばれまい。

(4)　暴風はつのり

暴風(あらし)はつのり、浪は荒れるとも、
　何んで浪風が怖(こは)からう。
しかし悩み悶ふ私の心をば、
　怪しんで下さいますなチャイルドさん。
私は父とも別れ、
　慈しみ深い母の傍を離れて、

現在は友といふ友もなく、
　あなたと神様だけを頼りにしてゐます。

(5)　父は心から

『父は心から、私の旅の幸を祈つて、
泣き言一つ口に出すことはありません。
しかし母は待ち遠しくて、
　私の帰るまでは心を痛めてゐるでせう。』
『幼きものよ、それは解つてゐる、
　それがお前の涙だらう、

私にもそんな感傷的な心があれば、
「この兩眼にも涙をたゝへてゐたらう。

（ ）　忠實な僕よ

『忠實な僕よ、さあ、こゝへお出で、
「どうしてそんなに蒼い顏をしてゐるの？
佛蘭西人の敵を怖れてか、
　烈しい暴風に慄へてか？』
『私が生命を惜しがつてゐるやうに思つて居られるの？
チャイルドさん、私は決してそんな卑怯者ではありません。

しかし家にある愛しい妻のことを思ふと、
私の顏は青くなつてゆきます。

（ ）　妻は子供を

『妻は子供をつれて、
　館に近い湖畔にゐるのです。
子供たちが父の在處を聞くとき、
妻は何んと言つて聞かせるでせう？
『僕よ、それは解つてゐる、
　お前の憂ひは眞實だ、

だが、輕薄な私は、
　旅行するにも笑つてゆく。

(8) 妻や女たち

妻や女たちの眞面目さうに悲しむ様子を、
　眞實に誰が思ふだらう?
新しい良人を得たら、
　いつか昨日の涙は乾いてしまふ。
過去の歡樂も思へば憂ふることはない。
　また來るべき夜も恐れることはない。

しかし別れの涙を流す人もない、
　この私は今更に悲しい。

(9) 今や私は

今や私はただ獨りこの世に、
　涯てない海の上を漂ふてゐるけれど、
私を憐んで哭れるものはない、
　それに何のために人のことを悲しまねばならないのだらう?
泣いて追ふてくる私の犬も、
　いつかは新しい飼主に飼はれ、

歸らうとする時、元の飼主を待ち伏せして、
突然(だしぬけ)に噛みついてくるだらう。

(10) おまへと共に

おまへと共に、わが船よ、
　逆卷く波を押し切つて進まう、
異鄕の地なら、
　どこへ行かうと構はない。
あゝ愉快だ、藍色の海よ！
おまへが見えなくなつたら、

砂漠でも洞穴でもやつて來い！
　さらば、わが故鄕よ。

『パリシナ姫』より

あひびき

I

樹々の間から、
夜鶯の朗かに囀る聲が洩れ、
戀人たちは契りを結ぶ言葉を、
ひそ〳〵とさゝやく。
そよ〳〵と吹く微風と、さら〳〵と水の音は、
さびしくも樂の音のやうに響く。

花はしつとりと露に濡れ、
空には星が往來(ゆきき)して、
波は藍色に、
樹々の葉は黄ばみ、
夕日は沒し、
月光に黄昏の色は淡くぼかされる時、
薄いコバルト色の空は、
薄闇の中にほのかに澄み渡る。

II

パリシナは居間を出ると、
水の流れる音を聞かうともせず、
薄闇の中をそゞろ歩きながら、
空の星の光りを仰がうともしない。
四阿屋(あづまや)の中に這入つても、
咲きみだれてゐる花を眺めようともしない、
耳を欹てながら夜鶯の調べを聞かうともしない、
ただ彼女は戀人のさゝやきを聞きたいばかりに待つてゐる、
この時ざわ〳〵と草を分けて忍び寄る足音を耳にすると、
彼女の頰はさつと蒼ざめ、胸は何時か波を打つて來た。

ざわつく木蔭から優しい聲が聞えると、
パリシナは頬をさつと赧らめて、胸は早鐘を打つやうに。
もう一瞬間で——二人は逢ふことが出來るのだ——
あゝ今こそ——戀人はパリシナの足許に跪くことが出來るのだ。

III

タイムの移りゆく世界も、
戀人同志にとつては何のかゝはりがあらう?
すべての生を享けるもの——否、天も地も——
戀人同志の眼や心には何のかゝはりもない。

これらのものすべてを、
無生物のやうに振りかへり見ることもなく、——
あらゆるものを遠ざけて、
戀人たちの胸は微かに呼吸をしてゐる。
吐息もすぐに喜びに變り、
ただいつまでも何時までも止めどなく、——
樂しさを貪る心は、
戀人同志の胸を焔でやきつけさうだ。
胸を搖がす樂しい夢の中に、
二人は罪の危險をも氣づかない。

燃ゆるやうな情愛を知つてる者なら、
こんな時、きつと躊躇するが、また恐怖に襲はれたりするだらう!
然ゝこの樂しい寸時の夢が、誰がすぐに破れようと思ふだらう。
しかし――それも今は過ぎてしまつた!
あゝ! あのやうな樂しい夢を、
再び見ることを得ないと知りながら、人は眼を覺まさねばならない。

IV

仇な樂しさに耽つた場所に、
幾度も名殘を惜しみながら戀人は去つて行つた。

またの逢瀬を望んで契りの言葉を結んだが、
何だかそれが最後の別離のやうに思はれて、戀人たちは深い憂ひに沈んだ。
幾度も深く吐息して――またぢつと抱き合ひながら――
唇と唇とをもて永遠に離れぬ接吻をかはした。
この時パリシナの顏は、
恐ろしい天の光りで、その罪を責められ、
意地惡な星は遙か彼方の空で、
靜かに彼女の弱きを蔑みながら光り輝いてゐた――
何度深い溜息をして抱き合つて見ても、

何時までも二人は其處から離れなかつた。
しかし遂に時は來た、犯した罪に責められて、
身は戰き慄え、胸は恐怖に襲はれ、
二人はたうとう別れて行かねばならなかつた。

『ドンジュアン』より

希臘の島々

(1) 希臘の島よ

希臘の島よ、希臘の島々よ！
そはサッフオの熱き戀に歌はれ、
戰ひと平和の中に市街は發展し、
デロスは興り、フイイバスを出せる地なり！
夏は永遠に島々を飾り、
陽は昇れど、今は見る影だもなし。

(2)　カイオスとテオスの詩人は

カイオスとテオスの詩人(うたびと)は、
英雄と美人の琴の音に、
名譽をば得たれど汝(な)が海邊は拒めり。
かの詩人の故郷(ふるさと)は今尚ほ默すれど、
汝の祖先なる「幸ある」島より、
更に響きは西方へ傳はれり。

註　カイオスはホーマーの故鄕、テオスはアナクレオンの故鄕である。

(3)　山々は

山々はマラトウンに對峙し、
マラトウンは海に面せり。
そこに我れは暫し瞑想し、
希臘の自由を夢の如く空想せり。
そは我れ波斯の人の墓前に立ちし刹那、
われ等は自ら奴隷たるを欲せざりし爲めなり。

(4)　王は斷崖の上に

王は斷崖の上に坐し
サラミス灣を見渡せり。
百千の船は眼路遙かに、
國の兵は皆わが膝下に、
王は黎明に彼等を閲せしも、
夕陽の沈む頃は、既に彼等は何處に在りや？

(5) あゝ彼等は

あゝ 彼等は何處に在りや？
然し我國よ、汝は何處に在りや？

沈默の汝が海邊に雄々しき歌は絶えて、
雄々しき胸も早や躍らず！
然も久しく貴ばれし汝の竪琴は、
われの手に落ちて汚され果つべきや？

(6) 名聲を失ひ

名聲を失ひ、蔑まれし人種となるとも、
愛國者として恥を知り、
わが歌ふ折に顏を隱しなば、
聊かなりとも賴む甲斐ぞあるべき。

何故に詩人は此處に殘されしぞ？
希臘人の恥を知り、希臘の國を憂ふる爲にこそ。

――拔　萃――

『海　賊』よ　り

メドラの唄

(1) わが心の底ふかく

わが心の底ふかく、
長き闇の夜を獨り、
優しき祕密は住む、
わが胸の君が胸に、
觸るゝは樂しけれど、
君と離れし折は、

常に寂しさに襲はる。

(2) わが心の中に

わが心の中に、
人知れず灰色の灯は、
いと微かに燃えつれど、
光は朧げに且つ弱く、
あるか無きかの光をば、
愁ひの暗闇に湛へつゝ、
常に寂しく燃えてあり。

(3) われを忘れ給ふな

われを忘れ給ふな、
哀れに思ふことなく、
わが墓を過ぎり給ふな、
わが胸の一つの、
耐え難き苦痛は、
戀しき君がみ胸により、
忘れ果てしと知れよかし。

(4) 慕はしくも消え去る

慕はしくも消え去る、
臨終の遺言を聞き給へ、
德義をも咎むることなく、
亡き此の身を憐れみ、
常に優しき涙を注ぎ給へ、
思ひこがれたるわが戀の、
報ひこそは常に變ることもなし。

—拔萃—

大正十五年五月十七日印刷
大正十五年五月二十日發行

泰西詩人叢書第八編
バイロン名詩選集
(定價金八十錢)

譯者 松山敏
東京市牛込區横寺町四三
發行者 後藤誠雄
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷者 谷口熊之助

發行所
東京市牛込區横寺町四三
聚英閣
電話牛込四六二番
振替東京四七八六九

—(濟口印刷所印刷)—

ユ4656

◇泰西詩人叢書◇

番號	書名	譯者	定價	送料
(1)	シエリー詩集	牛山充譯	・八○	・○六
(2)	エマスン詩集	中村詳一譯	・八○	・○六
(3)	バアンス詩集	生田春月譯	・八○	・○六
(4)	佛蘭西近代詩集	藤林みさを譯	・九○	・○六
(5)	ポオ全詩集	佐藤一英譯	一・一○	・○六
(6)	ブレイク詩集	渡邊正知譯	・九○	・○六
(7)	ハイネ名詩選集	松山敏譯	・八○	・○六
(8)	バイロン詩集	松山敏譯	・八○	・○六
(9)	ゲーテ名詩選集	松山敏譯	・八○	・○六
(10)	ユーゴー詩集	加藤利美譯	・八○	・○六